

- ① イスラム教はマホメット (Mahomet・五七〇年ごろ〜六三二年) により創始された。彼は、アラビアのメッカ (Mecca) 郊外のヒラ (Hira) 丘で、祈禱中にアッラー (Allā) 神の啓示を受けて、新宗教としてイスラム教を創始したといわれている。
- ② 当時、アラビア (半島) の宗教は多神教で、石、天体、泉、樹木等を崇拜する風習が広まっていたという。
- ③ マホメットの出生当時、アラビア地方に一神教であるユダヤ教とキリスト教が伝えられ、徐々に信者が増えて、一神教に対する一般人の関心が高まっていた。
- ④ メッカでも、この影響で唯一神の信奉者が増えていたが、彼らは「ハニーフ」と呼ばれた。
- ⑤ マホメットは、ヒラ山の洞窟で最初の天の啓示を受けて

- 布教を始めたが、すべての宗教創始時と同じく、イスラム教も最初は一般人の関心を引かず、十年目にやっと百名の信徒を得ただけであった。
- ⑥ それに直ちに、為政者の迫害が加えられ、マホメットはやむを得ずメッカを離れ、その北の方のメディナへと避難しなければならなかった。そこでマホメットは、「ウンマ」と呼ばれるイスラム共同体を創立し布教に励んだ。これがイスラム教の創始だった。
- ⑦ その後、紀元六三〇年一月に、カーバ神殿 (メッカの教会であるモスクの中心を成す石造の神殿) (註1) へ入り、カーバ神殿をアッラーに仕える神殿に変えた。
- ⑧ これがきっかけになってイスラム教が急速に広まり、短時間でアラビアの大半がイスラム教に変わった。
- ⑨ こうして、広大なアラビア地域の雑多な信仰がこの時、ようやく一つの教理による信仰組織として統合されるようになった。

特別寄稿

連載 第4回
(最終回)

原理から見た宗教統一

— イスラム教と宗教統一 —



ホン 軒
サン 相
イ 李
世界宣教師 (36家庭)

一 序

人類歴史を宗教の出現という観点から顧みると、多宗教の出現はメシヤ降臨と関係があることが分かる。特に原理的観点から見ると、宗教は六数期間の法則により、メシヤ出現の六数期間前後に出現したことを歴史は語っている。イエスの出現の六数期間 (六世紀) 前に、ユダヤ教が出現し、韓国においては再臨の六十年前に天道教 (韓国の代表的民族宗教) が出現した。ほかの宗教の出現も同様である。イスラム教の出現も、メシヤの初臨、または再臨と関係があると見るのが統一原理的観点である。

本論文では、イスラム教も当時の雑多な諸宗教を統一するために出現した一種の統一宗教と見ているが、今日、イスラム教は宗教統一に失敗した宗教として残されるようになったのである。次に、本論でこれについてもっと具体的に考えてみることにする。

二 本論

(一) イスラム教の成立と主張と信条

(1) イスラム教の成立…まず、イスラム教の成立について調べてみる。

(註1) アラビア人たちは、イシマエル(アブラハムの長子でハガルの産んだ子)に彼らの先祖として侍^{はべ}っているが、このカーバ神殿には彼の生母ハガルが埋葬されているという(アガベ聖書事典一四三四ページ)。

(2) イスラム教の主張と信条

① イスラム教の創立当時、アラビア地域ではさまざまな雑多な神を信ずる多神教が支配的であった。このような多神教に対して、一つの革新宗教として出現したのがイスラム教であった。イスラム教の唯一の主張は、神は唯一であり、その唯一神はアッラー神であるということだった。

② このアッラー神は、マホメットが啓示を通して得た唯一神であったが、本来マホメットが出現する前に、アッラー神はアラビアのメッカ地方で多くの神の中で最高の神として崇拜されていた。しかし、マホメットにより他の神はすべて否定され、アッラーのみが唯一の神として、また万物の創造主として確定されたのである。

③ イスラム教の根本信条

a イスラム教の初期の根本信条は、「アッラー以外の神はいない」ということであった。すなわちイスラム教は、アッラー神以外の神はすべて否定したのである。

b 後に「アッラー以外の神はいない」という根本信条にもう一つの信条が加えられた。それは「マホメットはアッラーの使者である」ということであった。これを「後期の根本信条」と言っている。

c ところで、イスラム教信仰の要点は最初が「知」で、二番目が「言」、三番目が「行」である。つまり信仰をするには知って(知)信じるべきで、不断に信条を唱えながら(言)、また実践しながら(行)、信じるということである。

d ほかに、イスラム教では五つの実践要目、つまり義務があるが、これを五柱という。その内容は次のようである。

(i) その一は証言または告白である。

これは「アッラー以外に神はなく、マホメットはアッラーの使者であるということを証します」と、所構わず常に唱えることをいう。

(ii) その二は礼拝である。

これは毎日決まった時刻に、規定された形式に従って礼拝を行うことをいう。

(iii) その三は喜捨(または天課)である。

これは一定の金額を多少を問わず、自ら進んで納付する献金を意味し、非イスラム国家では宣教基盤をつくるのにどうしても必要な献金であって、ムスリムの義務となっている。

(iv) その四は断食である。

これは毎年、イスラム暦の九月になると、昼間は断食、禁煙を行い、言行を慎んで、できるだけ「コーラン」を誦することをいう。

(v) その五は巡礼である。

これは大祭に参加することを意味し、だれもが少なくとも一生に一回は、毎年メッカの郊外で開かれる大祭に義務的に参加(巡礼)しなければならない。

(一) 原理から見たイスラム教

原理の立場から、イスラム教の出現の摂理的意義を調べてみる。まず、イスラム教に対する文先生の観点をご自身の演説文を通して調べてみる。

(1) イスラム教に対する文先生の演説文(「イスラム教と世界平和の定着」九〇年十月二十一日カイロでのみ言…『統一思想』第一九巻)の要点

① 「平和の根は神であり、したがって、神の意志(み旨)を実践する時、真の平和が実現される」「したがって、神が立てられた宗教(イスラム教を包む)が平和のために協力する時のみ、真の平和が実現される」

②「特に、歴史的に神の摂理とサタン妨害が、尖鋭に對立してきた中東地域で真の平和が実現されるとき、世界平和は容易になされるようになっていく」つまり、世界平和の実現の成否は中東によって決まる。

(2) キリスト教とイスラム教の歴史的考察

①キリスト教の始祖はイエスであるが、イエスの血統の始祖はイサクを経て、アブラハムと彼の本妻であるサラである。

②イスラム教の始祖はマホメットであるが、マホメットの血統の始祖は、イシマエルを産んだ、アブラハムとその妾のハガルである。

③イサクを産んだサラと、イシマエルを産んだハガルとの関係は、アベルとカインの関係である。

④したがって、キリスト教とイスラム教の関係は、まさしくアベルとカインの関係なのである。

⑤したがって、今日のキリスト教とイスラム教の対立は、結局アベル側のサラと、カイン側のハガルの対立の延長であることが分かる。

⑥ところで、すでに述べたように信仰の祖アブラハムとその二人の妻(サラとハガル)の後孫がそれぞれイエスであり、マホメットであった。すなわち、イエスはサラの血統から生まれ、マホメットはハガルの血統から生まれたのである。

(3) イスラム教の出現の意義

①したがって、イエスの十字架刑がなかったならイスラム教の出現はなかった。なぜなら、十字架がなかったならイエスは、後に全人類の真の父母になられたからである。

②イエス以後の紀元六―七世紀ごろにマホメットが出現した摂理的理由

a イエスの十字架の後、恐らく霊界にいるハガルがアブ

ラハムに要求したのであり(註2)、サラもしかたなくハガルの子孫マホメットを六世紀(六数期間)後に出現させることを黙認、あるいは承認したと考えられる(註3)。

b ここで、二つの六数期間である六〇年と六〇〇年の中で、六〇年では資格を備えた摂理的人物を探し立てることが容易でなかったために、六世紀後にマホメットを探し立てたと考えられる。

(註2) 恐らく、ハガルが霊界でアブラハムに「あなたの子孫の中で、サラの血統を受け継いだイエスが十字架刑になり、救世の使命を成せなかった今、同じあなたの子孫である自分の血統を受け継いだマホメットを、人類の指導者として立てるべきではないでしょうか」と要求したと考えられる。

(註3) ここで六数期間とは、神の万物創造開始から、人間(アダム)を創造するまでの六日間を意味する(創世記1/26―31)。

(4) 再臨主による統一

①このような理由のために、キリスト教とイスラム教の対立の根源は、結局サラとハガルとの対立であったと見るのが正しいであろう。なぜなら、キリスト教の始祖であるイエスは、アブラハムとサラとの後孫であり、イスラム教の始祖であるマホメットは、アブラハムとハガルとの後孫であるからである。つまり、イエス様の「始祖母」はサラで、マホメットの「始祖母」はハガルである。

②したがって、サラとハガルの対立を和解させることができるのはアブラハムだけである。

③アブラハムは信仰の先祖であり(註4)、アブラハムの立場を蕩滅復帰した立場がメシヤ、あるいは再臨のメシヤである。したがって『原理講論』に「アブラハムの象徴献祭の失敗によって、アダムからアブラハムに至るまでの二千年の期間を喪失、奪われてしまったので、この期間を蕩滅復帰するため、アブラハムからイエスまでの二千年の期間が必要だった」(『原理講論』二八二ページ)と書かれて

いるのである。

(註4)「アブラハムを信仰の父という理由はここににある。それゆえに、結果的に見れば、アダムからアブラハムまでの二千年の期間は、信仰の父であるアブラハム一人を立てて……その基台をつくる期間であった……」(『原理講論』二八二ページ)

④ところで、イスラム教はイエスよりはるか後に出現したので、再臨のイエスのみが、すなわち再臨のメシヤのみが、キリスト教とイスラム教を和解させることができる。つまり、キリスト教とイスラム教の統一は再臨のメシヤの教え(原理)によってこそ可能になる。

(三)原理がキリスト教とイスラム教を和解させることができる理由

では、統一原理がキリスト教とイスラム教を和解させることができる理由は何であろうか？ それは両者が顕著な相違点をもつていながら、最も重要な点において共通点を

持っているからである。

次に両者の相違点と共通点を調べてみる。

(1)両教の相違点

①イエス観の違い

キリスト教はイエスを救世主と見ているが、イスラム教はイエスをマホメットと同じく、アッラーの使者として見ている。

②經典観の違い

經典の性格にも違いがある。つまりキリスト教の經典である新旧約聖書は、神様とイエスのみ言と撰理的人物たちの行跡の記録であるが、イスラム教の經典(コーラン)はアッラーの神の啓示とマホメットの行跡だけの記録である。

③救援観の違い

a キリスト教の救援観は、イエスが来られて善悪を分立し、審判され、善人に恵みを与えらるゝとなっている。

b イスラム教は、アッラーとマホメットの教えが全世界

に広げられて日常生活が集団礼拝の生活になるとき、理想世界つまり全人類がアッラーの教えに従う平和の世界が実現できると教えている。

いるからである。

a 神によって宇宙と人間が創造されたという点

b 人間の先祖が堕落したという点

c 人類歴史を罪悪史と規定している点

d 人類歴史に終末が来るといふ終末観を持っているが、原理もこの四つの共通点を持っている。

④メシヤ観の有無

キリスト教にはメシヤ(救世主)観があるが、イスラム教にはメシヤ観がなく、イエスもマホメットと同じく一人の預言者(アッラーの使者)に過ぎないと見ている。

(2)両者の共通点

両者は神の宇宙創造と、人間創造の事実や人間墮落の事実を認めている。また両者とも、人類歴史を罪悪史と規定すると同時に、終末に神の撰理によって人類が救われるという救援観を持っている。

(3)原理が両者を和解させることができる理由

①第一に、原理は両者の次のような共通点をすべて持つて

②第二に、原理はこのような共通点を具体的に明らかにしている。

a 宇宙と人間の創造の動機、目的、方法を明らかにしている。

b 人間墮落の具体的な内容を明らかにしている。

c 蕩滅復帰歴史の理論をもって、罪悪史の内容を具体的に明らかにしている（いわゆる「六段階過程の復帰歴史」の内容がこれである）。

d 具体的な終末観（終末到来の必然性、終末現象、終末後の新世界の性格など）を提示している。

③原理は、両者が明らかにできなかった問題点を解決している。つまり、以上の四つの点を明らかにしたほかに、次のような問題点も明らかにしている。

a 創造の根本動機であると同時に、神の核心的な属性である「心情」とはいかなるものか？

b 人間墮落の動因となった者は天使なのか、人間なのか？

c 人類歴史に発展の法則が作用したのか？

d 終末観はなぜ必要なのか？

今日まで、これらの問題点を、いかなる宗教も、いかなる思想も明らかにできなかったが、原理はこれを明確にしている。つまり、終末は罪悪史の終末であると同時に、罪のない歴史の始まりを意味するのである。

④以上の三つの条件でもって、両者の教えを補完し、引き上げて、高次元の立場から一つに統一した教えが統一原理であるために、原理が両者を和解させることができるのである。

四 終末の宗教統一とイスラム教

(1) 終末における多宗教の出現と統一の必然性

①人類の精神を善に導くため、時と所によってさまざまな特性を持った宗教（儒教、仏教、その他の各国宗教）が出現したのは不可避であった。

②しかし創造目的の完全達成の時期、すなわち地上天国実現の直前の段階である終末において、神の摂理は、地域、

民族、言語を超越して唯一の基準となる神の教えで全人類を一つにしなければならないので、分立された宗教を一つに統一することは必然である。

(2) 終末の宗教統一とイスラム教

①このように終末は宗教統一の時であるために、歴史の終末において、すべての宗教は例外なく神のみ言の真髄（真理）を中心として統一の対象になる。その真髄のみ言が統一原理であり、統一思想である。

②したがって、イスラム教もほかの宗教と同じく、結局、

高次元の真理の教えに吸収、統一されるようになるのである。

三 結論

以上を要約すると、異色の宗教だといえるイスラム教も含めてすべての宗教が、統一原理によって残らず統一されるようになるのは、統一原理がすべての宗教の核心教理をみな持っているからである。言い換えれば、全宗教の教理の核心部分をすべて備えた教えが統一原理であるので、統一原理によって宗教統一が可能になるのである。

光言社のほん

第1章 迫害の道 第2章 興南收容所の真実 第3章 生き証人・金仁鎬氏に聞く
第4章 神が造った興南解放 第5章 誰も書かなかった朝鮮戦争秘話 第6章 明かされた興南肥料工場秘史

愛の奇跡

武田吉郎 共著
竹谷匡生

北朝鮮・興南收容所の真実 ● 新書判 ● 定価八〇〇円（税込）



光言社受注センター
FAX(03)5478-1521 TEL(03)3460-0429